



狩野光信の時代

黒田泰三 (出光美術館学芸課長) 著

結語より

狩野永徳を父に、狩野探幽を甥に持つ絵師狩野光信。しかも彼は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の時代を過ごした。決して歴史のターニングポイントを偶然に生きただけではあるまい。そこには、むしろ歴史の偶然をたぐり寄せた光信の持つ生まれた必然を感じる。彼は現実を肯定的に生きたのだろう。そうでなければ、これだけの偶然を乗り切れるとは思えない。そのような意味で、光信は美術史上もっと注目されてよい絵師のはずである。事実、江戸時代の画伝類で、その花鳥画が高く評価されていたにもかかわらず、狩野永徳や探幽と比して顧みられることは少なかったように思う。あるいは、その原因にやはり江戸時代の早い時期に貼られた「拙」「下手」というレッテルが影を落としているのかもしれない。しかし今、たとえば勸学院客殿障壁画を見て、いったい誰が拙と嘲り、下手と切り捨てたのだろうか。光信をこの先も常に父との比較、甥への橋渡しという歴史的役どころとして、歴史という書物のたった一頁の片隅に名前を留めさせるわけにはいかない。

光信が描いた「豊臣秀吉像画稿」がある。画稿であるだけに、未完成の感は否めないが、像主を象る描線の何と伸びやかなことか。瞳の下、口元に施された細線は顔貌のアクセントとなり得く肖像画に生氣を送り込んでいる。これほどの人物表現能力を持つ絵師に、ほかに人物画が存在すると考えるのは自然である。光信は花鳥画のみならず人物画の名手でもあったのではないかと直観し得る。すなわち、宗像大社の三十六歌仙図扁額には出現するべくしてあらわれたのである。あらためて『丹青若木集』を読むと、人物画家としてすでに認められていたことを知る事ができる。光信は我々の従来の認識を超えて広い芸術的領域を有した存在かもしれない。期待が膨らむのである。

光信は、まちがいに永徳とは異なる芸術を志した。それは狩野元信への回帰である、とは従来の考察である。無論私はそれを否定はしない。しかし、光信の眼前には永徳が圧倒的に存在していたわけで、仮に光信が元信に回帰したとしても、その際光信が行なったのは永徳との関係の確認であつたはずだ。永徳との関係を認識してはじめて光信は自らの立場を知り、志を立て得たはずである。

結局光信は永徳の創り出した芸術には与しなかった。今本書を読み返してみても、光信は存外自らの画技に自信を持っていたのではないかと私は考えている。父に頼らず自らの美的領域を開拓するという強い志を持っていたように映る。その際は、現実を肯定的に見るといふ生来の資質にもつき、狩野派以外の芸術にも視野を拡げたのであろう。同時代には長谷川等伯がいた。独学ではあるが、それ故桎梏に囚われることなく、自らの意思にもとづく表現を行なった等伯に、光信が惹かれていったとしても不思議ではない。光信花鳥画における叙情性という美的特質は元信への回帰からではなく、直接等伯の影響とは言わないまでも、同時代の空気感から生まれたと見たい。

さらに、光信の人物画からは、「彦根屏風」をはじめ寛永期に次々と出現する、狩野長信による優れた遊楽図が導き出された。永徳から探幽への時代を、仮に情熱から冷静への時代と換言したとき、長信の遊楽への感性を刺激したのは、光信という微熱の時代ではなかったか。

狩野光信といつひとりの絵師の切り拓いた歴史の側面をこのように見ることによって、桃山時代後期から江戸時代初期を、従来知覚することのなかった、新たな美しき豊かな絵画の時代と呼ぶことができる。狩野派内は言つに及ばず、光信は時代の核心にいたのだ。

本書で取り上げた作品たちの語る寡黙なメッセージをもっと早く聴き取り語るべきだったのだろう。この十年や二十年という時間ではなく、二百年も三百年も早くという意味だ。しかし、個々の言葉が集まり紡ぎ出す協和もある。今は、まずそれに耳を傾けよう。協和はやがてひとつの美術の時代を語り出すことになろう。

狩野光信の時代である。

■体裁

B5判 上製函入 口絵32頁
本文264頁 挿図151図

■定価

23,100円(本体22,000円+税)
ISBN978-4-8055-0551-9 C3071

狩野永徳の嫡男として安土城障壁画などに従事し、永徳没後は狩野一門の中心として豊臣秀吉の肥前名護屋城の襖絵などを制作した光信は、父永徳の豪放な巨木表現に代わり、華麗な金碧画のやまと絵の伝統に近づいた優美な叙情性を発揮し、花鳥画家と謳われた。この狩野光信の花鳥画だけではなく、人物画家としての新たな認識を喚起する。それに加え狩野長信の作品を発掘し、風俗画制作に係わる彼の評価を構築する。

目次

序言

第一章 光信の花鳥画

第一節 勸学院客殿障壁画

(一)一之間障壁画／(二)二之間障壁画／(三)勸学院障壁画における創造と模倣

第二節 光信の周辺

(一)「州信」印四季花鳥図屏風／(二)桜・桃・海棠図屏風／(三)花鳥画群／

(四)春秋花鳥図屏風

第二章 光信の人物画

第一節 やまと絵系人物画

(一)宗像大社蔵「州信」印三十六歌仙図扁額／(二)妙法院蔵三十六歌仙図扁額

第二節 漢画系人物画

(一)西王母・東方朔図屏風／(二)韃靼人狩獵図屏風

第三節 光信の周辺

(一)高台寺蔵三十六歌仙図扁額／(二)玄宗皇帝・楊貴妃図屏風(クラーク・コレクション)／(三)曾我物語 富士巻狩・仇討図屏風／(四)そのほかの作品

第三章 光信様式への影響

第一節 長谷川等伯の動物画

(一)動物の感性を描く

第二節 松林図屏風

(一)松林図屏風の制作年代に関する一考察

第三節 等伯の影響

(一)狩野長信の存在

第四章 光信・長信と長谷川派

第一節 光信と長谷川派

(一)長谷川等伯と狩野探幽—等伯筆竹虎図屏風に書かれた紙中樞についての一考察

第二節 長谷川派の風俗画

(一)長谷川等伯の野外遊楽図屏風

第五章 長信の風俗画

第一節 相応寺屏風

(一)相応寺屏風の筆者について

第二節 花下遊楽図屏風・伝本多平八郎姿絵屏風・彦根屏風

(一)彦根屏風の画家—狩野長信の可能性

結 び



狩野光信筆 三十六歌仙図扁額
藤原興風(部分) 宗像大社蔵

著者略歴

黒田泰三(くろだ たいぞう)

出光美術館学芸課長

1954年福岡県生まれ。1978年九州大学文学部哲学科美学美術史専攻卒業。同年出光美術館学芸員となり、現在に至る。専門は日本近世絵画史。近年の主な研究テーマは、桃山時代の狩野派と長谷川等伯、文人画家田能村竹田、仙厓、伴大納言絵巻などである。これまで、九州大学、東京芸術大学、女子美術大学、成蹊大学、日本女子大学で教鞭を執る。著書に、「伴大納言絵巻」(新編名宝日本の美術 小学館 1991年)、「田能村竹田」(アーティストジャパン 同朋舎出版 1996年)、「長谷川等伯」(新潮日本美術文庫 新潮社 1997年)、「思いつきり味わい つくす伴大納言絵巻」(アートセレクション 小学館 2002年)などがある。

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取り扱い